この世界は……

この世界では、「セックスが推奨されている」。
なんでも、性的なことに潔癖になりすぎた結果、ひどく人口が減って——国力が落ちたらしい。それも、世界的に。
そんなことがあったものだから、その反動で、逆に性的なことがオープンに、そして日常的なものになった。
セックスとは、隠れて行う夜の秘密ではなく——日の下であけっぴろげに話題に出すものへ。
——男は性欲的に、女は淫らに。
そんなセックスが推奨されている——またの名を「貞操観念が終わっている世界」に生まれた前世持ちの男——巽（たつみ）リョウ。

そんな男が、やむにやまれぬ事情で、同級生に始まり、教師や大企業の社長まで、さまざまなひととそういうこと（セックス）をする、これは、その多忙な日々の物語である。

スランプにはセックスが効くらしい

――スランプ。

なにかを続けていれば当然にあるものだ。辛く苦しい時間も、諦めずに続けていけば乗り越えられる。それは分かっている。分かっているが、ふと思う。

――自分はもう、ここまでなのでは。

不安が足を引っ張る。真面目に努力して、努力して。それでも壁を越えられなかったら？　ここまでだと示されてしまったら。

考えすぎなのだと分かっている。ただ、自分――冬馬晶（とうまあきら）には、同じ形の片割れがいるから。同じように笑い、同じように怒る、自分とよく似た人間が。

双子というものは、ひどく面倒だ。

よく似た気質を持ってしまったせいか、やることなすこと重なることが多い。現に同じ競技の部活に入り、互いに競い合っている。

片割れとは身体能力もセンスもほとんど一緒。上達の速度も同じで、なんだかんだここまでやってきた。

それでも細部は違うもので、晶が比較的簡単にできたことが片割れにはできず、逆の場合もたまにある。片割れが一歩先を行くたびに、晶はなにくそと追いかける。そして、その逆も。

今回は、自分が追いかける番になっただけだ。それは分かっている。けれどいつも以上に時間をかけても思う通りに上達しなかった。朝も昼も放課後も、できる限りの時間を使っているのに。ついにはオーバーワークだからと休むように言われてしまった。

荒々(あらあら)しくロッカーの扉を閉め、荷物を持って部室から出る。わあわあと楽しそうに騒ぐ生徒たちに背を向けて歩く。本来ならば自分もそこにいたはずなのに。そんな思いが、晶の顔を歪(ゆが)ませた。

さて、これからどうするか。

自主練という手もあるが、バレたらきっと怒られる。となるとやれることは限られてくる。

スランプになったときは、悩みの原因から一度遠ざかるのがいい、なんて言われているけれど。

……思い浮かぶものといえば。

勉強。却下。頼まれてもやりたくない。空いた時間に勉強なんて。ガリ勉じゃあるまいし。宿題だって授業前にそれっぽく空欄を埋めればどうにかなる。

食事。……気にはなるが、おそらく今やると暴食になる。でもってたぶんおいしく食べられない。それは食べ物に対する冒涜である。

睡眠。……これも気になる。が、今の気分で素直に眠れるかというと多分無理。いつもならば目を閉じた次の瞬間には夢の世界に旅立っているのだが、今だけは無理そうだ。

となれば……。

唐突だが、晶は人間の三大欲求が特別強い。つまり食欲、睡眠欲、性欲である。

食うことがすきで、眠ることもすきで、きもちいいこともすき。前のふたつは今の気分ではない。残るはセックスというわけだ。

セックスは好きだ。だが、高校に入ってからは人間関係が面倒で遠ざかっていた。それでも、今日ばかりは人肌が恋しかった。

誰か手軽な相手はいないだろうか。じゃなけりゃ駅前にでも行って見繕うか。

とりあえず、とMATCH――国が開発した性交管理アプリ――を開いてスクロールをしていく中で、ぴたりと指を止める。

「これ……」

見覚えのある顔写真。誰だっけ、と記憶を探る。しばらくして、隣のクラスで騒がれていた男子生徒だと思い出した。

自分で言うのはどうかと思うが、晶の顔は整っている。そして同じ顔の片割れもそうだ。小学生の頃も中学生の頃も、そして高校生の今もきゃあきゃあと騒がれていた。

高校に上がってからは控えているが、中学までは望まれるままに付き合ってだいたい振られていた。相手を一番にできなかったからだ。晶にとっ

ては部活の方が大事だった。それは片割れも同じで、どちらかというと片割れの方が想いは強かったと思う。でもって片割れも晶ほどではないが、中学までは遊んでいた。高校になってからは煩わしくなったのか特定の相手は作っていないようだが。

だがまあ、特に片割れは衆目を集めるのが好きなので持て囃(はや)されるのも嬉(うれ)しそうにしていた。ちなみに晶の方は別に好きでも嫌いでもない。

そして、自分たちと同じか、それ以上に熱い視線を集めているらしい男。それが、この顔写真の主だった。片割れが「気に入らない」とぶちぶち文句を言っていたのを覚えている。

顔が良くて、セックスもうまい。学年の高嶺(たかね)の花も彼に抱かれて虜になっているらしい。けれど特定(パートナー)の相手は作らず、マッチで商売をしている。

いいじゃん、と思った。

ちょうどいいじゃん。

晶はただセックスがしたいだけ。その後の関わりは必要としていない。

そもそもセックスなんて、互いにストレッチを手伝い合っているようなものだ。

あるいはマッサージ。肉体的なコミュニケーション。そこに特別な意味はない。

けれども現実はそう単純にいかないもので。セックスをすると晶の恋人面をしてくる相手だったり、〝次〟をねだってくる相手だったりがよくいたのだ。それで晶がただセックスしたかっただけ、と言うと、思わせぶりなことをしてひどい、とこちらを責めてくることさえある。

その点、商売としてやっている相手はいい。それも、晶と同程度か、もしかしたらそれ以上に顔とスペックのいい相手は。晶をブランド物のバッ

グ扱いせずとも、よりどりみどりに選べるのだろうから。

そして。予約欄はほとんど埋まっていたが、ぽっかりと空いている時間がひとつだけあった。

このすぐ後の時間である。晶は軽快にタップして予約を入れた。

しばらくするとメッセージが来る。『どこで落ち合う?』というそれに、『休憩室の玄関』と返す。セックスのために予約をしたのだから、わざわざどこかで待ち合わせしてから移動など必要ない。

さっさとやることをやってしまいたかった。

まともに顔を合わせるのは初めてな彼――巽（たつみ）は、噂（うわさ）に違わぬ端正な青年だった。なんだかんだ持ち上げられるのが好きな片割れが嫉妬の目を向け

るのも分かる。晶個人の感想は、『悪くない』。自分たちとは系統が違うが、人気になるのも分かる顔立ちと雰囲気だった。

巽はその場で、慣れた様子でセックスにあたっての注意事項を口にし、晶はそれを受け入れて金を払った。

「どういうふうに抱かれたい？」

巽がタチだということはマッチに書いてあり、承知の上だった。晶はその上で金を払っている。

受け身は体の負担が大きいが、晶は若いし体力もある。たしかにタチの方が楽で好きだが、ネコが嫌いというわけでもなかった。

「うーん……。むちゃくちゃ気持ちよくしてほしい」

回答はそれに尽きる。スランプを忘れさせるくらい、あるいは乗り越えられるくらいのセックスをしてほしい。

その後も巽はいくつか質問をした。

甘やかされるのは好きか。強引な方がいいか。痛いのは好きか。もどかしいのは嫌いか。

答えるのは少し恥ずかしかった。けれど、その程度の自己分析は授業でもやっている。

巽は晶の傾向と希望を聞くと、ひとつ頷(うなず)いた。

「わかった。甘やかされるのは好きで、強引なのは嫌いじゃなくて、もどかしいのも悪くない。でも痛すぎるのはダメってことだな」

そうして彼は、はっと目を奪われるほど、妖艶に笑った。

※※※

学校が用意している休憩室（ヤリ部屋）に入ってすぐ、さっさとシャワーを浴びてベッドの上で巽と向き合った。

さて、どうする？　と試すような気持ちでいると、自然に唇を重ねられた。それだけで「おっ！」と思った。不自然さも性急さもない、お手本のようなキスだった。

ちゅ、ちゅ、と啄（ついば）むだけのそれの後、これまた何の引っかかりもなく、舌先で唇がノックされた。当然、拒むこともないので薄く口を開く。潜り込んできた舌を迎え入れて絡めた。

「ん♡　……ふっ、……ちゅっ♡」

ぴく、と肩が震える。そこまではまだ余裕があった。だがすぐにその余裕も崩される。

「ぁ、ふっ♡、……っ、んんっ♡！」

彼の熱い舌が晶の口の中で踊る。気づけば晶は巽にすがりついていた。

（――正直、ナメてた）

セックスがウマいと言ってもどうせ高校生レベルだろうし、顔がいいからその分下駄を履かされているのだろうと。

全然違った。ホントのホントに――むちゃくちゃウマい。

「ん♡、ぁっ、ふっ……♡、……、ふっッ、ッッ♡」

上顎を舌先で擦られて腰が砕けた。舌を擦り付けあって、戯れに噛まれて、ぴくぴくと震えてしまう。

晶はキスをしてとろとろになる、という経験をはじめてした。

自分がセックスが上手い方だという自負があった。だって、相手が誰だって少し触ってやるだけで、少しキスしてやるだけで、興奮して真っ赤になって気持ちよさそうにしていた。瞳を潤ませて、鼓動を早くして、最後

に必ず「よかった」と言われていた。

でもそれはもしかしたら。……「気持ちよさそう」というのは「気持ちよさそう」でしかなく、「気持ちいい」とは全く別だったのでは。あるいは、彼らも本当の気持ちよさを知らなかったのではないか。あれを「気持ちいいこと」だと信じていたから、児戯のようなもので満足できていたのでは……。

そう思うくらい、巽とのキスは善かった。

「ん……っ♡　っ、ふーっ♡」

巽は本当に上手い。晶が完全に息苦しくなる前に息継ぎのタイミングを作ってくれる。息をした後は、また唇を塞いで甘やかしてくれた。

「ん、ち……ゅ……♡、っ♡、ふ…っ♡　…っ♡」

まるでひとつの生き物のように動く巽の舌が、晶のイイ場所を余すこと

なく探り当てていく。

薄い酸素の中、思考がぼんやりと浮き始める。現実感が薄れて、ふわふわとしていた。ただゆるやかに注ぎ込まれる快楽が心地よくて、晶は眠そうな猫のようにゆっくりと瞬きをした。

（キスって、こんなに気持ちいいんだ……♡）

興奮のまま絡め合うのとは違う。ただ口と口が合わさって、それだけでなにもかもが許せるような気持ちになる。けれど熱は落ち着くばかりか、逆にゆっくりと高められている。

「は……、ちゅっ♡、っ♡」

思考が端から砂のように崩れていく。少し前までの苛立ちも怒りも、さらさらとこぼれて消えていった。

「ぁっ♡　……、ぁ、……♡♡　ふ♡、……ん……っ♡」

気づけばベッドに仰向けに沈んでいた。

はずみに口が離れる。さみしさに口を開けて舌を伸ばすと、ぱくりと咥えられて吸われた。

「ん～～～～♡」

頭の中でぱちぱちと小さな火花が弾ける。その気持ちよさに目を細めた。

しかし油断していると、舌に歯を立てられて、擦られ、背筋が粟立つ。ぞりぞりとした舌の表面を歯が通り抜けて、腰が浮いた。

「ぁ……あっぁ♡　んー♡！　んー♡！　んー♡！」

まるでフェラするみたいに巽の頭が上下に動いて、その度にぞくぞくとしたものが背筋を這う。

神経を直接いじられているみたいだった。あまりの強さに逃げたくなる。それなのに晶の身体は快楽に貪欲で、もっと、というように舌を突き出し

ていた。

巽は心得たように、舌への愛撫(あいぶ)を繰り返してくれる。

ぞり♡、ぞり♡、と晶の舌が、巽の舌に、歯に、噛まれて、舐(な)められて、食べられている。

「ん……ぁあ♡　っ♡、ふっっ♡、っっ……♡　……っっっ♡♡」

息が苦しい。苦しいのに、きもちがいい。

快楽というぬるま湯に、全身を浸されているような心地だった。

サンプルはここまで！

このあとも、ひたすらにトロトロにされていきます♡

続きは、製品版で♡